

日本語と朝鮮語における姿勢動詞の対照研究(1)

深 見 兼 孝

1. はじめに

本稿は日本語と朝鮮語の姿勢動詞(*posture verb*)タツと *seta*、スワルと *ancta* の意味を、人間主体の場合に限って、主に動態的側面から対照考察することを目的とする¹⁾。今回は数値的な面と訳語の面を取り上げる。

人間にとって何らかの姿勢を取ることは基本的な動作の一つであろう。しかし、これを表す言語手段となると、単純動詞が用いられるかどうかでさえ、言語によって異なる。例えば、英語には *stand*, *sit*, *lie* があり、これらは人間の基本的動作を表す単純動詞という意味で基本動詞と言ってもいいであろう。朝鮮語にも辞書的な意味としてそれぞれ対応する単純動詞 *seta*, *ancta*, *nwupta* があり、これらも朝鮮語の基本動詞と言ってよいであろう。しかし、日本語では *lie* や *nwupta* に対応するのはヨコニナルという句ではないだろうか。

また、これらの3つの姿勢は、少なくとも人間の基本的な姿としては文化や社会の違いに関わらず、同じように見える。しかし、姿勢動詞の、言語間の意味の違いは、人間の場合に限っては、その動態的側面に現れるように思える。人間主体の場合に限って、タツと *seta*、スワルと *ancta* の意味を主に動態的側面から対照考察することは、これらの動詞の意味について理解を深めるだけでなく、日本語、朝鮮語の二言語に限らず広く姿勢動詞一般に関する理解を深めることにも繋がるであろう。

2. 先行研究

Newman(2002) は、姿勢動詞の意味を「中心的意味」と「拡張された意味」に分け、前者は文字通り人の姿勢であるとし、姿勢動詞の意味特徴を導く方策として、3つの領域(*domain*)と1つのゾーン(*zoon*)の「意味的フレーム」を設定している。そして、英語の姿勢動詞 *sit* と *stand* の「中心的意味」を表1のように表している²⁾。

このうち、「時空間的領域」と「活動ゾーン」に関して、タツと *seta*、スワルと *ancta* は、それぞれ *stand*, *sit* と違いはないように思える。しかし、Newman(2002) は、英語の姿勢動詞は状態動詞としているが、日本語や朝鮮語の姿勢動詞は基本的には姿勢の変化を表すのではないだろうか。また、日本語や朝鮮語の姿勢動詞が表す状況には、姿勢の変化とともに、その後の姿勢の維持

または継続の2つの局面が含まれるように思われる。終止形はもっぱら姿勢の変化を表し、連体形や接続形のうち後続節の表す動作にまでその姿勢がかぶっていると解釈される(付帯状況)場合は、姿勢の変化と維持または継続の両方が含まれるであろう。

表1 英語の姿勢動詞

	sit	stand
時空間的領域	比較的コンパクト	縦に伸びた
動態的領域	中程度の制御とバランス	最高度の制御とバランス
活動ゾーン	臀部(と上半身)	脚(と上半身)
社会的／文化的領域	仕事やリラックスに適している	もっとも身体的に力強い

(Newman 2002:2, 筆者改訳)

北嶋(1977)は日本語の「家に入る」に当たる朝鮮語として、ネイティブなら *cip·ey tulekata/cip·ey tuleota/cip·ey tuleseta*[家・處格 入る](グロスは筆者による)と言うであろうとし、「……さらに付け加えるならば、*tuleancta* となって、*kata*[行く]と *ota*[来る]の対立が見られる。さらに動きを表現する *kata*と *ota* に対して *seta*と *ancta* は静止で対立している」(p.8)としている。*seta*と *ancta* は「動態的領域」においてタツとスワルより制御が低いことを窺わせる。

Song Jae Jung(2002:368-377)は、*seta*と違って *ancta*と *cappacita*³⁾は、より静的なので、-ko 接続形の動詞と結びついたものが文法化し、継続相を担う補助動詞として機能するとしている。ここから、姿勢の制御に関し、*ancta*は *seta*よりさらに低いことが窺える。

しかし、ネイティブの直観として、少なくとも姿勢変化の局面において、タツだけでなくスワルも姿勢の制御が低いとは感じられない。タツとスワルはテ形に補助用言化した存在動詞イルが、*seta*と *ancta*は *a/e* 副詞形に補助用言化した存在動詞 *issta* が付く(タツテイル、スワツテイル、*se*(<*se·e*) *issta*, *anca issta*) ことによって結果状態の存続を表す。タツ、スワル、*seta*, *ancta* が「動態的領域」において違いがあるとすれば、上に挙げた活用形やタツテイル、スワツテイル、*se*(<*se·e*) *issta*, *anca issta* の出現の様相にも差が出てくると思われる。また、翻訳においてもタツと *seta*、スワルと *ancta* 相互の翻訳の様相が異なってくるのが予想される。

3. 方法

資料は小説とその翻訳である。オリジナルが日本語のもとその朝鮮語訳、オリジナルが朝鮮語のもとその日本語訳を使用した。用例収集に当たってはオリジナルにおけるタツ、スワル、*seta*, *ancta* の(意味上の)主語は「人」とした。ただし、オリジナルにおいて態に関わる形態変化が認められるもの(日本語で言えば可能形、使役形、受け身形)は採用しないことにした。そして、数値と実例をとおして、主にオリジナルで終止形(終結形)、実質名詞を修飾する連体形(冠形詞形)、および付帯状況を表す接続形(以下、単に「接続形」)に関し、タツ/*seta*、スワル/*ancta* に翻訳されなかった場合と、翻訳はされたが形式⁴⁾が保持されていない場合を分析する。特に、アル、

issta による結果状態表現へ翻訳された場合にも注目する。ただし、今回は最初に述べたように、数値的な面と訳語の面を取り上げ、例文の分析は次回に回したい。

4. 結果状態の形式

オリジナルにおけるタツ、スワル、seta、ancta の用例数は、各々288、250、164、289であった。タツとスワルの用例数はほぼ同じだが、seta と ancta とでは、前者は後者の約 56.7 パーセントの出現率しかない。そのうち結果状態を表す形式テ形+イル、-a/e 副詞形+issta(タツテイル、スワツテイル、se issta、anca issta)の用例数は、139、98、86、90であった。タツテイルとse isstaの用例数はそれぞれタツ、seta 全用例数の半数程度である。これに対し、スワツテイルとanca isstaはそれぞれスワル、ancta 全用例数の4割に満たない。

表 1 はタツと seta、スワルと ancta の間の翻訳率(%、カッコ内は実数)⁹⁾を、テ形+イル、-a/e 副詞形+issta とその他の形式に分けて示したものである。表 1-1 は日本語からの翻訳、表 1-2 は朝鮮語からの翻訳である。形態を問わず、タツが seta に、スワルが ancta に、seta がタツに、ancta がスワルに翻訳された用例は、それぞれ 223、239、73、161 であった。全体翻訳率はこれらの全用例数に対する割合である。

表 1-1 タツと seta、スワルと ancta の翻訳率(日本語から朝鮮語へ)

	se issta	その他の seta	合計	全体翻訳率
タツテイル(139)	87.8(122)	3.6(5)	91.4(127)	77.4(223)
その他のタツ(149)	12.8(19)	51.7(77)	64.4(96)	
	anca issta	その他の ancta	合計	全体翻訳率
スワツテイル(98)	85.7(84)	9.2(9)	94.9(93)	95.6(239)
その他のスワル(152)	3.3(5)	92.8(141)	96.1(146)	

表 1-2 タツと seta、スワルと ancta の翻訳率(朝鮮語から日本語へ)

	タツテイル	その他のタツ	合計	全体翻訳率
se issta(86)	50.0(43)	2.3(2)	52.3(45)	44.5(73)
その他の seta(78)	3.8(3)	32.1(25)	35.9(28)	
	スワツテイル	その他のスワル	合計	全体翻訳率
anca issta(90)	55.6(50)	6.7(6)	62.2(56)	55.7(161)
その他の ancta(199)	4.5(9)	48.2(96)	52.8(105)	

表 1 の全体翻訳率を見ると、タツよりスワル、seta より ancta の翻訳率が高いが、日本語からの翻訳率の方が高い(特にスワルから ancta への翻訳率は9割を超えている)。また、オリジナルの形式別に見ると、結果状態の形式はそうでない形式に比べ翻訳率が高い(ただし、スワルは形式に関係なく翻訳率が高い)。まず、結果状態の形式を見ると、タツテイルよりスワツテイル、se issta

より *anca issta* の翻訳率が高く、かつ日本語からの翻訳率の方が高い。次に、結果状態の形式でない場合も、タツよりスワル、*seta* より *ancta* の翻訳率が高く、かつ日本語からの翻訳率の方が高い。さらに、結果状態を表す形式は結果状態を表す形式に、そうでない形式はそうでない形式に翻訳される傾向にあるが、結果状態の形式でないタツは、1割を少し越えるぐらいが結果状態形式の *se issta* に翻訳されている。他の語ではこの現象は3-4パーセントしか起こっていない。

以上から、タツから見て *seta*、スワルから見て *ancta* は意味的に重なるところが大きい、特に後者において大きく、逆から見た場合は、意味的に重なる部分が相対的に小さく、特に *seta* から見たタツにおいてより小さいと言えよう。その一方で、これらの姿勢動詞は、結果状態の形式とそうでない形式において、おのおの互いに似た意味を表し、とくに結果状態の形式においてその傾向が強いと言えそうである。

5. 単一形式

この節では、補助用言が後に続く場合を除いた形式(以下「単一形」)から、終止形、連体形、接続形に限って分析と考察を行う。終止形には引用形および命令形は含まず、オリジナルと翻訳の時制の食い違いは考慮していない。接続形の典型的な形式として、日本語では連用形とテ形、朝鮮語では *-a/e* および *-ase/ese* 接続形を選んだ。表 2 はタツと *seta*、スワルと *ancta* の間の翻訳率を見たものである。翻訳の結果としての動詞の形態は考慮していない。表 3 はタツと *seta*、スワルと *ancta* が相互に翻訳されたもののうち、どの程度対応する形式が使われたかを実数で示したものである。結果状態の形式に翻訳されたときにおける存在動詞(日本語イル、朝鮮語 *issta*)の形態は考慮していない。

表 2 を見ると、タツと *seta* の間よりスワルと *ancta* の間の翻訳率が高いが、日本語から朝鮮語への翻訳率がより高いことが分かる(特に、スワルから *ancta* への翻訳率はスワルの形式に関わらず 9割を超える)。形式別ではタツは接続形で、スワルでは(9割は越えているが)連体形で、*seta*、*ancta* への翻訳率が最も低い。また、*seta* は連体形で、*ancta* は終止形で、タツ、スワルへの翻訳率をもっとも低い。そして、それはタツの連体形を除いて、他の語句への翻訳が主たる要因である。このことから、タツから見て *seta*、スワルから見て *ancta* は意味的に重なるところが大きい、特に後者において大きく、逆から見た場合は、意味的に重なる部分が相対的に小さく、特に *seta* から見たタツにおいてより小さいと言えよう。これは表 1 から得た結果と同じである。形式の面を考慮すれば、タツから見て *seta* は接続形において、スワルから見て *ancta* は連体形において意味の違いが大きく、*seta* から見たタツは連体形で、*ancta* から見たスワルは終止形で意味の差が大きいと思われる。

他の語句への翻訳について見ると、タツではどの形式でも2割-3割程度起こっているが、スワルでは連体形には見られず、終止形と接続形に2-3%程度見られる。*seta* ではどの形式にも他の語句への翻訳が見られるが、連体形において7割以上であるのに対し、終止形が6割、接続形が3割程度で、終止形と接続形では2倍程度の差が見られる。*ancta* でも全ての形式で他の語句

への翻訳が見られるが、終止形と接続形の翻訳率にやはり2倍程度の差が見られる。すなわち、タツとスワルの翻訳では、他の語句への翻訳が終止形と接続形に共通して起こっているが、終止形と接続形におけるその比率がタツでもスワルでもあまり変わらない(タツは3割を少し越えるくらい、スワルは3%前後)のに対し、setaとanctaの、終止形と接続形における他の語句への翻訳率は、終止形において接続形の2倍程度であり、接続形より終止形の方が他の語句に翻訳されやすい。

削除について見ると、タツでは連体形と接続形で削除が見られるが、比率的には接続形が3倍ほど大きい(5.9%と15.0%)。スワルは連体形にのみ1割弱起こっている。一方、setaでは削除の例は接続形でしか見られないが、他の語句への翻訳率に近い。anctaではすべての形態において2割台で削除が起こっているが、接続形での比率がわずかに高い。すなわち、タツとスワルの翻訳では終止形に削除が起こっていないが、seta、anctaの翻訳にはそのような共通現象は見られない。また、スワルは連体形にのみ、setaは接続形にのみ削除が見られる。一方、スワルを除けば、すべて接続形に削除が起こっている。そして、タツとanctaでは連体形でも削除が起こっているが、どちらも接続形での比率が高く、接続形の方が削除が起きやすい。

表 2-1 単一形式タツとseta、スワルとanctaの翻訳(日本語から朝鮮語へ)

		seta	他の語句	削除	計
タツ	終止形	68.2(15)	31.8(7)	0.0(0)	100.0(22)
	連体形	70.6(12)	23.5(4)	5.9(1)	100.0(17)
	接続形	52.5(21)	32.5(13)	15.0(6)	100.0(40)
		ancta	他の語句	削除	計
スワル	終止形	96.4(27)	3.6(1)	0.0(0)	100.0(28)
	連体形	90.5(19)	0.0(0)	9.5(2)	100.0(21)
	接続形	97.6(40)	2.4(1)	0.0(0)	100.0(41)

表 2-2 単一形式タツとseta、スワルとanctaの翻訳(朝鮮語から日本語へ)

		タツ	他の語句	削除	小計
seta	終止形	35.7(5)	64.3(9)	0.0(0)	100.0(14)
	連体形	25.0(3)	75.0(9)	0.0(0)	100.0(12)
	接続形	37.1(13)	34.3(12)	28.6(10)	100.0(35)
		スワル	他の語句	削除	小計
ancta	終止形	30.3(10)	45.5(15)	24.2(8)	100.0(33)
	連体形	44.0(11)	32.0(8)	24.0(6)	100.0(25)
	接続形	47.7(42)	22.7(20)	29.5(26)	99.9(88)

表 3-1 形式間の対応:(日本語から朝鮮語へ)

		終止形	連体形	接続形	-a/e issta	その他	計
タツ	終止形	11	0	0	3	1	15
	連体形	0	6	1	5	0	12
	接続形	0	0	19	2	0	21
スワル	終止形	26	0	1	0	0	27
	連体形	0	19	0	0	0	19
	接続形	0	0	39	1	0	40

表 3-2 形式間の対応(朝鮮語から日本語へ)

		終止形	連体形	接続形	ーテイル	その他	計
seta	終止形	4	0	0	0	1	5
	連体形	1	0	0	2	0	3
	接続形	0	0	12	0	1	13
ancta	終止形	8	0	0	1	1	10
	連体形	0	3	0	4	4	11
	接続形	1	0	36	0	5	42

表 3 を見ると、対応する形式に翻訳される傾向が強い。しかし、スワルを除いてはどの語も連体形において結果状態を表す形式に翻訳される率が高くなっている。これは連体形が結果状態の局面も含むことを示していると思える。

6. 他の語句への翻訳

6-1 タツと seta

表 4 はタツと seta の訳語の一覧である。

表 4 タツと seta の訳語⁶⁾

	終止形	連体形	接続形
タツ	ilenata[起きる], kata[行く], nathanata[現われる], ttuta[離れる]; aphcangseta[前に立つ], ileseta[立ち上がる], memchweseta[立ち止まる]	chwuliph al swu issta[出入りができる]; nathanata [現われる], thata[乗る], tteoluta[浮かぶ]	ilenata[起きる](5), kata[行く](2), naota[出る], nathatata[現れる]; ileseta [立ち上がる](2), naseta[出る](2)

seta	アシヲトメル(3)、チョクリツ フドウバンセイヲトル; タチス クム、タチドマル(4)	イル(本)、イル(補)(2)、ソ コ、タイショスル、ツクル、ヒ カエル; タチハダカル、タ チフサガル	カゼニフカレル; イッショニ、 ススム、ツクル、ヒカエル、 マワル、; タチスクム、タチツ クス、タチドマル、タチハタ ラク、ツッタツ(2)
------	---	--	--

タツは姿勢というよりは移動を表す語句に翻訳されているのが目につく。特に kata (行く) は終止形と接続形の両方に出ている。終止形に出ている ttuta (離れる) も移動動詞と見てよいだろう。出現を表す nathanata (現われる) はすべての形態で出ている。また、連体形には出現を表す tteoluta (浮かぶ) への翻訳がある。出現も、知覚(認識)外の領域から知覚(認識)内の領域への移動と考えてよいだろう。

姿勢に関係した動詞として ilenata (起きる) への翻訳が終止形と接続形に見える。ilenata は横たわった姿勢から座った姿勢へ、または座った姿勢から立った姿勢への変化を表すが、タツの訳語としては後者に当たる。この例の意味としては ileseta (立ち上がる) と実質的に変わらないと思える。

seta を含む複合動詞に翻訳された例が終止形と接続形に見える。特に、ileseta (立ち上がる) は終止形と接続形の両方に見える。翻訳家が姿勢の上方への伸びを明確にする必要があると感じたのであろう。接続形に見える naseta は移動動詞で、seta は移動した後の結果としての姿勢を表す。北嶋(1977)の挙げた tuleseta と同じ構造である(2節参照)。

以上のように、タツが seta 以外の語を使って翻訳されている場合は、移動や上方への伸びを表す語句に翻訳されている。これは翻訳家がタツが seta に比べてより動的な意味を持つ場合があると感じていることの反映であると言える。また、終止形と接続形に同じ訳語が現われており、終止形と接続形の類似性が窺える。

これに対し、seta がタツ以外の語を使って翻訳されている場合は、接続形にススムとマワルへの翻訳が見えるが、それ以外は、ヒカエルを含み多くは停止もしくは動かないことを表す語句に翻訳されていることが目につく。また、タチスクムとタチドマルは終止形と接続形の両方に見える。特に目を引くのは連体形でイルに翻訳されている例である。これは、翻訳家が seta を姿勢ではなく存在として表現したり、存在さえ後ろに後退させて表現した方が日本語らしいと感じているからに他ならないだろう。さらに、連体形と接続形には動詞を含まない翻訳も見える(ソコ、イッショニ)。動的意思を含まない表現に翻訳されているのである。

以上のように、seta がタツ以外の語句に翻訳されている場合は、停止や動かないこと、あるいは存在の表現に翻訳されていることが特徴的である。動詞を含まない表現に翻訳されている場合を含め、翻訳家が seta がタツに比べより静的な意味を感じていることの反映であろう。また、終止形と接続形の他に、動的意思を含まない翻訳という点で、連体形と接続形の類似点も見えるが、連体形はイルへの翻訳や(代)名詞ソコへの翻訳という点で、より静的でありうると言えよう。

6-2 スワルと ancta

表 5 はスワルと *ancta* の訳語の一覧である。

表 5 スワルと *ancta* の訳語

	終止形	連体形	接続形
スワル	<i>cwuceancta</i> [座り込む]	(なし)	<i>cwuceancta</i> [座り込む]
<i>ancta</i>	コシヲオロス(4)、セキニツク(2)、ミヲスズメル; イル(補)コシカケル(2)、ツク(3)、パチクリサセル; スワリコム	ウマノリニナル、コシヲオロス; イル(本)、イル(補)(3)、モタレカカル; ノ	ウシロムキニナル、コシヲオロス、トリトメノナイカンガエヲウチキル; カケル(2)、コシカケル、シャガミコム(4)、シャガム、タンザ(端座)スル(2)、ヘタリコム、モドル; スワリコム(5)

スワルは終止形と接続形において *ancta* を後項とする複合動詞 *cwuceancta* (座り込む) に翻訳されている例が1つずつあった。

ancta はどの形式でも他の語句に翻訳された例が見える。特に、コシヲオロスは全ての形式で、コシカケルは終止形と接続形に現われている。コシヲオロスは、文字通り重心(腰)の下方移動を明示すると考えてよいだろう。コシカケルやセキニツクもやはりコシをカケル(のせる) / ツケルという重心の移動が明示されている。この移動は当然下方への移動に違いない。この他、セキニツクとツクは「席」を、コシカケルとカケルは「腰」を翻訳で表しているかどうかの違いである。これらの動作は座った姿勢への変化には腰を目的地点に移動させるという点で制御が必要であるが、立った状態での作業を停止するという特徴があるように思える。一方、ミヲスズメル、スワリコム、モタレカカル、シャガミコム、シャガム、ヘタリコムは、姿勢変化の局面において重力に任せる部分が大きく、その結果としての重心の下方移動が起こり、制御は弱い。スワリコムも終止形と接続形に出ている。

以上のように、*ancta* は重心の下方移動と停止ないし姿勢制御の弱さを表す語句に翻訳されているのが特徴である。スワルと *ancta* の訳では互いに *cwuceancta* / スワリコムのような制御が弱いことを表す訳語が選ばれることがあるが、それは *ancta* の訳語に圧倒的に多い。これは、スワルと *ancta* には似た面があると同時に、*ancta* がより静的でありうることを翻訳家が感じていることを示すものと思われる。それは、存在動詞イルへの翻訳や動詞でない助詞ノへの翻訳からも窺える。ただし、助詞ノへの翻訳は連体形で起こり、イルへの翻訳は終止形と連体形で起こっており、より静的でありうるという点で、終止形と連体形の共通性も見える。

7. 中間のまとめ

まず、タツから見て *seta*、スワルから見て *ancta* は意味的に重なるところが大きいですが、特に後者において大きい。しかし、朝鮮語から見た場合は、意味的に重なる部分が相対的に小さい。特に *seta* から見たタツにおいてより小さいと言えよう(表1、2)。形式面から言えば、タツから見て *seta* は接続形において、スワルから見て *ancta* は連体形において意味の違いが大きく、*seta* から見た

タツは連体形で、*ancta* から見たスワルは終止形で意味の差が大きいと思われる。そして、それはスワルの連体形を除いて、他の語句への翻訳の多さにも反映していると言えよう(表2)。

具体的な意味の違いは、他の語句への翻訳から窺える(6節)。タツが *seta* 以外の語句を使って翻訳されている場合は、移動や上方への伸びを表す語句に翻訳されているのが特徴である。これは、タツが *seta* に比べてより動的な意味を持つ場合があると、翻訳家が感じていることの反映であると言える。上方への伸びは重力に逆らった動作なので、姿勢の制御が必要である。立って移動するのももちろん姿勢の制御が必要であろう。*seta* がタツ以外の語句に翻訳されている場合は、停止や動かないこと、あるいは存在の表現に翻訳されていることが特徴的である。動詞を含まない表現に翻訳されている場合を含め、翻訳家が *seta* はタツに比べより静的な意味を持つ場合があると感じていることの反映であろう。ここには姿勢の制御という側面は出ていないように感じられる。*ancta* がスワル以外の語句を使って翻訳される場合は、重心の下方移動と停止ないし姿勢制御の弱さを表す語句、あるいは存在の表現に翻訳されている。スワルと *ancta* の訳では互いに *cwuceancta* / スワリコムのような制御が弱いことを表す訳語が選ばれることがあるが、それは *ancta* の訳語に圧倒的に多い。これは、スワルと *ancta* には似た面があると同時に、動詞を含まない表現に翻訳されている場合を含め、翻訳家が *ancta* がスワルより静的な場合があると感じていることを示すものと思われる。すなわち、本来タツ、スワルに比べ *seta*, *ancta* は静的で姿勢の制御性が弱い、あるいは制御性とは関係のない意味を持っていると考えてもよいのではないだろうか。

他の語句への翻訳と削除からは形式間の異同も見える(表2)。他の語句への翻訳は終止形と接続形に共通して起こっているが、終止形と接続形におけるその比率がタツでもスワルでもあまり変わらないのに対し、*seta* と *ancta* は接続形より終止形の方が他の語句に翻訳されやすい。削除の点から言えば、タツとスワルの翻訳では終止形に削除が起こっていないが、*seta*, *ancta* の翻訳にはそのような共通現象は見られない。また、スワルは連体形にのみ、*seta* は接続形にのみ削除が見られる。一方、スワルを除けば、すべて接続形に削除が起こっている。そして、タツと *ancta* では連体形でも削除が起こっているが、どちらも接続形で削除が起きやすい。

これは少なくとも部分的には、終止形と接続形が姿勢の変化の局面を表すという点で共通する一方、連体形と接続形は、姿勢変化の後の結果状態の局面も表すという点で共通するという点、及び本来タツ、スワルに比べ *seta*, *ancta* は静的で姿勢の制御性が弱い、あるいは制御性とは関係のない意味を持っていることの反映ではないだろうか。まず、タツとスワルの翻訳では終止形に削除が起らず、*seta*, *ancta* の翻訳にはそのような共通現象が見られないのは、タツとスワルの終止形が動的でより制御性の強い姿勢変化を表しているからだとは言えないだろうか。また、接続形は姿勢変化後の結果状態の局面も表すが、そこでは姿勢の制御は弱化するであろう。しかし、本来動的で制御性の強いタツとスワルはこの影響をあまり受けず、逆に *seta* と *ancta* は接続形での姿勢の制御が削除を選ぶほど著しく弱くなり、終止形との差が大きく開いてしまうのであろう。また、連体形で削除が起こることがあるのも、連体形が姿勢変化の後の結果状態の局面も表すからであらう。

また、終止形と接続形には同じ訳語が見られるという共通性も見いだされる。ただし、*ancta* の翻訳の場合、助詞ノへの翻訳は連体形で起こり、イルへの翻訳は終止形と連体形で起こっており、終止形と連体形の共通性も見える(6節)。

その一方で、これらの姿勢動詞は、結果状態の形式とそうでない形式において、おのおの互いに似た意味を表し、とくに結果状態の形式においてその傾向が強いと言えそうである。さらに、終止形は終止形に、というように対応する形式に翻訳される傾向が強い。しかし、スワルを除いてはどの語も連体形において結果状態を表す形式に翻訳される率が高くなっている。これも連体形が結果状態の局面も含むことを示していると思える(表3)。

以上、ほとんどが数値の面から見た結果である。他の語句への翻訳では実際の訳語を見たが、全てを取り上げた訳ではない。また、全てがタツと *seta*、スワルと *ancta* の意味の違いを反映しているとは言い切れない。訳語の意味は例文を通して確認する必要がある。削除もタツと *seta*、スワルと *ancta* の意味の違いを反映していることもあろうし、翻訳家が簡潔性を求めた結果かもしれない。削除の例を含め、例文を通した検討が必要である。

注

- 1) 朝鮮語は *The Yale Romanization* によって表記したが、一部簡略化している。
- 2) *lie* については省略する。
- 3) Song Jae Jung(2002:368-377)では *nwupta*(横になる)の俗語とされている。
- 4) パターン化した形態を「形式」と呼ぶことにする。一つの形式は一つ以上の形態の集合である。また、文法形態の名称は日本語と朝鮮語(カッコの中)で異なるが、形式の名称としては日本語の名称に統一した。ただし、「接続形」は朝鮮語文法から採用した。
- 5) 表2以下も、特に断らない限り同様である。
- 6) 2回以上現われたものだけ、その回数をカッコに入れて示す。また(本)は本動詞、(補)は補助動詞であることを示す。表5も同様である。

言及した文献

北嶋静江 (1977)「日本語朝鮮語対照言語学の展望」『朝鮮学報』第85輯, 1-13.

Newman, John(2002) A cross-linguistic overview of the posture verbs 'sit', 'stand', and 'lie'.
In *The Linguistics of Sitting, Standing, and Lying* [Typological Studies in Language 51], John Newman (ed): 1-24. John Benjamins.

Song Jae Jung(2002) The posture verbs in Korean: Basic and extended uses. In *The Linguistics of Sitting, Standing, and Lying* [Typological Studies in Language 51], John Newman (ed): 359-385. John Benjamins.